

大学の普遍性と 地域に根差す大学の溢れる魅力



しみず 清水 潔
しずおか 学館大学学長

あた 湊 晶子
ひろしま 女学院大学学長

地域に根差す大学の個性、役割、
目指すべき方向性

芹澤 2005年の「我が国の高等教育の将来像（答申）」で大学の機能別分化という方向が示され、それにつながる文部科学省の私立大学等改革総合支援事業が2013年度と2014年度に実施されました。本年度も、同じような規模で継続されると聞いております。各私立大学が建学の理念のもとにさまざまな施策を立て、取り組むなか、私立大学等改革総合支援事業は、個々の大学の方向性を明確にさせるための政策誘導であるとの意見もありますが、一方で、理念、歴史・文化が異なるさまざまな私立大学は、自らの個性、役割を社会に明確に示していかなければいけなくなってきました。



さかき ひろゆき
榊 裕之
豊田工業大学学長

むなかた のぶひこ
棟方 信彦
松山東雲女子大学学長

しんかい
せりざわ たけし
芹澤 剛
園田学園女子大学教授
人間教育学部教授
インテリジェンス情報・情報センター広報・情報部門会議（大学時報）委員

本日は、地域に根差す大学が個性、役割や目指すべき方向性をいかに定め、どのように改革を進めていくのかについて、さまざまな取り組みを行う私立大学の学長の皆様にお話しいただきたいと思えます。まずは、現在の大学改革全般についてのお考えをお聞かせください。

建学の理念、地方大学の責任、「ぶれない個」を確立した女性の輩出

湊 私は2002年から2010年まで東京女子大学という大都市の大学の学長を務めた後に、昨年からは地方の広島女学院大学の学長を務めてみて、初めて地方の大学の苦勞を実感しておりますので、本日はそのような視点からお話ししたいと思います。

広島女学院は、来年、創立130年を迎える広島県で唯一のプロテスタント女子教育機関です。女性の人權も政治参加も認められなかった明治の初期に、砂本貞吉が米国で洗礼を受け、広島に帰国して女学会を開学し、3年後にゲーンズを校長に迎え今日があります。大学としては1949年、戦後いち早く開学し、創立以来の「キリスト教主義人格教

育」を堅持し、「地方の女子大学としての責任」を守り通してきました。価値観が多様化している現代だからこそ広島女学院大学が持っているリベラルアーツの伝統を大切に、「21世紀の女子大学」として、「ぶれない個」を確立した女性を送り出したいというビジョンを持っています。

地域社会が抱える課題を 大学が地域社会とともに担う

清水 皇學館大学は、神職の養成から出発した大学であり、神道精神を根幹とする建学の理念を一貫して継承し、3年前に創立130周年を迎えました。1882年に時の神宮祭主・久邇宮朝彦親王の令達により、神宮の学問所・図書館として、1687年に設立され、約200年の歴史を経ている林崎文庫に創設されました。建学の精神は、わが国の歴史や伝統文化を究明し、その成果と精神を自らのうちに体現して社会実践に努めるところにあります。

創立された当時は、いわゆる文明開化の名のもとに西洋文明を取り入れ、近代化を急いだときでした。あまりに急ぎ過ぎたために欧

化主義が全体を覆い、その結果、わが国の学問教育の伝統や価値観や文物が軽視され、見失われる状況の中で、それを反省して創立された教育機関の一つです。今わが国はグローバル化、人口減少、地方の衰退、少子高齢化、人間関係の希薄化など、さまざまな課題に直面しています。特に、本学がある三重県南勢地域は、これから人口が急減する地域の一つですので、その課題に正面から向き合い、大学がどう担っていくのか、地域貢献人材育成のプログラムを立ち上げたところです。

棟方 松山東雲学園は、来年、創立130年を迎える歴史ある学園ですが、今も松山に現存する松山教会の牧師のもとを一人の少女が訪れ、「どうか女子が学ぶことができる教育機関をつくってください」というたった一人の少女からの要請に応える形で創立された学園です。その創立以来、「キリスト教主義による女性教育」という建学の理念をしっかりと守り、地方の大学の責任を果たすべく、その路線を守り通したいと考えています。

現代の大学改革について思うことの一つは、やはり環境の変化です。日本はもともと資源が限られていますので、人的資源の礎と

なる教育をしっかりと行うことこそが、日本の社会の明日につながります。その意味では、グローバル化をはじめとする環境の変化のもと、さまざまな機関や組織が変革を余儀なくされているなかで、大学および高等教育に対する社会からのより実践を重視した教育への変革要請は当然のことだと受け止めています。

松山東雲女子大学は地方都市に立地する規模の小さい学校であり、厳しい競争にさらされています。18歳人口の減少や、それに備えるための基盤の強化が必要です。

私自身は、ほぼ生涯の大半をマーケティングの実務に従事してきたこともあり、われわれの学園は明日の社会に生きる人材育成に對するニーズに、十分に対応できているかということの再確認が必要ではないかと考え、日々の改革に取り組んでおります。大学には、いろいろな問題意識を持った学生がいまですが、学生たちが社会に出て、社会からよこんで受け入れてもらえるような育ち方をさせた上で送り出すことを心掛けています。

神 私は8年前に豊田工業大学にまいりましたが、その前は、学生時代も含めて43年

間、東京大学にいました。国立大学と私立大学それぞれが大きな役割を分担し、日本を、そして世界をよくしていく使命があると思っています。

創意工夫の意欲と能力を持つ 主体的人間を育てるといふ使命

榑 豊田工業大学は、トヨタ自動車(株)の社会貢献の一つとして1981年に誕生した大学です。トヨタ自動車は、豊田自動織機製作所(現在の豊田自動織機)に開設された自動車部が起源で1937年に誕生したのですが、その中心人物が豊田喜一郎です。喜一郎の父の佐吉は、教育システムが未整備の明治の前半に、自学自習によって家族のため、村人のために織機の自動化に邁進し、豊田自動織機製作所を創業し、今のトヨタグループの基礎をつくり上げた人物です。佐吉は自学自習の人ですから、高等教育を受けると知識におぼれ、ヒトへの奉仕や創造の精神を忘れてしまうのではないかとという懸念をもっていました。息子喜一郎の大学進学にも反対していますが、喜一郎はこれを押し切って東京帝国大学の機械学科に進学した人でし

た。その後、トヨタ自動車を創設しますが、その際、技術や産業の発展には優れた人材が不可欠と感じ、社業繁栄の暁には大学を開き社会に貢献したいとの夢を持っていたそうです。喜一郎は、創業十五年で亡くなりますが、後継者たちが豊田工業大学を創立したので、

この喜一郎の考え方は極めて重要だと思います。大学教育では、知恵の伝達が行われませんが、この知恵を活かして社会に貢献するには創意工夫が不可欠です。したがって、大学は創意工夫の意欲と能力を持つ主体的人間を育てるといふ使命を認識することが重要だと思います。大学の機能別分化は確かに時代の要請ですが、大学を建物に例えれば、基礎工事は全てに共通であり、共通基盤の質を高めることが全ての大学に求められています。知的能力や人間性の基礎をつくる教育を忘れてはならず、その共通基盤があつての機能別分化であるべきだと思っています。

芹澤 先生方のお話をお伺いして、やはり社会の要請の生じる社会的課題と各大学の建学の理念を照らし合わせて、頭を悩ませながらもいろいろな方法で解決を図っていくこと

が改革の方向性を決していくことになるのだらうと感じました。

文部科学省の私立大学等改革総合支援事業にかかる申請に際しては、いくつかのタイプの中から優先順位を付けるのが難しいと思います。しかし、複数の改革を並行して進めるだけの条件やエネルギーがあるか否かを考えると、「選択と集中」ということも必要になるでしょう。

そこで、各大学で2014年度の方向性を決めた過程やご苦労になった点、新たな課題など、具体的な事例がありましたら、マネジメントやガバナンスといった観点からお話をいただければと思います。

清水 皇學館大学は、私立大学等改革総合支援事業のタイプ1(教育の質的転換)とタイプ2(地域発展)に、2年続けて選定されましたが、教育の質保証こそが全ての根幹であると考え、カリキュラムを単なるスリム化ではなく、精選しました。

何をどう教えるのかを突き詰め、教員一人当たりの担当授業数を減らし、一つの授業への注力度合いを高め、学生が集中して臨める授業数に絞り込もうと試みたものです。な

湊 晶子氏



お、検討の余地を残しています。

同時に、本学は日本人としての知性・教養を身に付けることが建学の精神に関わる重要な課題ですので、それを実現するための教養教育のあり方、そして幅広い中核的職業人を育成するカリキュラムをどうするか。この三点からカリキュラム改革を行いました。

本学には、人文社会学系の学部しかありません。卒業生の就職先は教員、神職や公務員などが中心である一方で、一般企業へ就職する学生も多いにもかかわらず、そのための教育がほとんどできていなかったことから、中核的職業人育成のため独自の「キャリア・コンパス・プログラム」を新たに作りました。1年次から、「人生と仕事」やビジネスの基

清水 潔氏



本を修得する実務能力養成科目を整備し、三重銀総研や県立農業大学校との連携科目の開設など、多くの魅力化を図りました。

また、これまで取り組んできたFD活性化の取り組み、アクティブラーニングの全学的な導入による授業前後の学生の主体的学習を促す体制づくり、さらに、さまざまなICTを活用した反転授業を展開しようとしています。これがタイプ1の内容です。

地域社会を担うアクティブシチズンの養成・ディプロマポリシーの明確化

清水 タイプ2では、これまで教員が個人的に、あるいは学生がボランティアで進めてきた地域に貢献する人材の育成を大学組織と

芹澤 剛氏



して行うこととしました。文部科学省の「地（知）の拠点整備事業（COC）」に採択された「伊勢志摩定住自立圏共生学」教育プログラムを4月から開始したところです。

伊勢志摩というエリアには、神宮を中心とした伊勢の歴史的・文化的・観光的資源や、国立公園という自然環境資源があります。そして、各地域の特性に合った経済・産業資源が存在します。それらを掘り起し活用しながら、どう展開するか。今、地域再生のさまざまな試みが行われていますが、結局は「この地域をわれわれが担っていくんだ」という人材の育成が最も重要だと捉え、地域を担おうとする志と情熱、それに知恵や行動力を具体的な地域の課題克服に取り組みることによつ

て養成するアクティブシブズンの育成を目指しています。

棟方 私は3年前の学長就任時、当時の状況を分析して二つの大きな目標を立てました。

一つは、今回のタイプ1に関わって、「大学を卒業させるといふことは、どのような能力を身に付けさせる必要があるかということ」を明確にしておくというものでした。

松山東雲女子大学の学生は、ほとんどが地元から本学に進学し、地元就職するといったように、地元志向が強い学生が圧倒的多数です。そうした女性のキャリアライフプランを考えると、人生のいろいろな時点でのリスタートが必要となるケースが多くあります。実際に松山東雲短期大学では、ある学科の入



棟方 信彦氏

学者の1割強は社会人であり、本学の卒業生が別の学科に再入学するということもありま。彼女らが自ら考え、問題意識を持ちながら生きるなかで、時には学び直しが必要になるわけです。その前提として、いつでも学び直そうという志を持った人材を送り出すために、まず基盤に当たる部分の質の強化を図ろうとタイプ1にエントリしました。

もう一つの特徴は、このタイプ1で設備の申請もしたことです。私が本学に赴任して最初に驚いたことは、教授会で「○○学科の○○さん」といったように、学生の個人名が交わされることでした。それくらい、教員が学生一人ひとりを丁寧に育てる志を持つており、そこにeポートフォリオという形でIC



神裕之氏

ITを活用して学生たちが自分の情報や問題、課題、報告すべきことを入力し、全体で閲覧できるような仕組みを整備しました。ペーパー式のポートフォリオは以前からありましたので、それを私立大学等改革総合支援事業でIT化してベースの向上を図ろうとしています。

**建学の理念に基づいた価値観の現場
レベルへの落とし込み**

棟方 タイプ2にかかわっては、地元の一般企業に就職する卒業生が多いことを考えると、カリキュラムも、大学生として大事な問題意識や真理探究の志を身に付けるだけではなく、やや実学的な出口を意識したものが必要になってきます。

そこで3年前に地元のア媛銀行と連携協定を結び、カリキュラムを共同で開発したり、特別なメニューでインターンシップを受け入れていただいたりしました。そしてその翌年には、愛媛県と連携協定を結んでプロジェクトベースドラニングのプログラム開発を始め、今年度からスタートできる形になっていきます。大学から比較的近い久万高原

町という過疎化の激しい地域の役場と協力して、カリキュラム開発に取り組んでいます。

改革を進めていく上で最初に手掛けたのは、具体的なカリキュラム改編やプログラムの開発ではありません。私立大学とは「志によって立つ志立大学」であるといわれますが、建学の理念こそが極めて大切だと考え、建学の理念こそが極めて大切だと考え、建学の理念から導き出される価値観を現場の作業に落とし込むことにこだわって、1年くらい議論をしました。本学には、一人ひとりを大切にす愛の精神で、社会や人に対して奉仕をする気持ちを持つことを尊ぶよき伝統があり、そうした伝統が、カリキュラムを改める際にも、地域に対するサービス精神を備えた学生の育成という方針にも結び付きました。

企業人だった私が、新人社員を最初に見極めるポイントは、チームの一員として快く受け入れてもらえる態度や性格、チームの中でうまくやっていく働きや知恵が決定的に重要だと感じています。コラボレーション、協働の役割を担うことができるかが重要であり、そのために、プロジェクトベースドラーニングとしてグループワークをスタートできるよ

うな仕組みを整えました。

私立大学はそれぞれが固有の価値観を持ち、独特の環境の中に置かれていますので、個別の道を歩まなくてはなりません。そのときに一番大事なのは教職員の気持ちを一つの方向にまとめることです。建学の理念をどのように現実の形に結び付けていくかというところに1年近くの時間がかかり、最も苦労した点でした。

多くの分野に共通の基礎、基盤を学び分野間の対話能力を持つことが大事

紳 豊田工業大学はタイプ1、タイプ3（産業界・他大学等との連携）およびタイプ4（グローバル化）と幅広く申請していますが、一番大事なことは教育の質の向上であり、それがきちんとできれば国際性も産業界との連携も自然に生まれてくると考えています。

では教育の質の向上には何をすべきか。工学系では、技術の発展が著しく、いくら学んでも追いつけないという印象を持つ人も少なくないのですが、これへの対処が必要です。私が東京大学工学部に入学して最初に教わったことは、テクノロジーの頭文字のTの

形が示すT型教育の大切さです。つまりTの縦棒のように深く、かつ、横棒のように幅広く学ぶことが工学系の学問には不可欠ということでした。私はそれ以来、幅広く学ぶことについて考えてきましたが、これは単に、種々の分野の個別知識を増やすのではなく、多くの分野を共通に支える基礎や基盤をしっかりと学び、分野間の対話能力を持つことが大事であるということです。これこそがリベラルアーツであり、人間や社会の根本に対する理解力であり、論理的や数理的に考える力などといったものです。そうした基礎的方法論をしっかりと学ぶと、人間の幅が広くなります。単にインターネットの量が増えるのではなく、土台自体に幅があれば、その上に構築されるものの翼が広がることとなります。

では人文系の素養に関し何が最も基礎的かという点、私はやはり哲学だと思えます。そこで、本学では工科系ですが哲学を必修にしています。プラトンの本を一冊だけ丁寧に読んで徹底的に議論して、議論の内容をレポートにまとめさせるということを3年前から始めました。学生たちの心には響いているようで、「生とは何か」「死とは何か」「魂と

は何か」といったことを、18歳の工学部の学生が熱く議論しています。18歳というのは、人生について考える時期であり、この哲学の授業が1年生の満足科目のトップスリーに入っているのです。また、経済学と国際関係の計3科目を必修にしています。

さらに、教室での学びに加え、34年前の創立時から全寮制をとっており、1年生は全員が寮に入ります。寮生8人でチームを作って、生活も勉強も互いに助け合う。そうした経験を通して学ぶ人間教育に力を入れています。寮は受験生に不人気だからやめようという意見もありましたが、寮生活を体験した学生の満足度は高く、現在はより立派な寮を建設中です。

もう一つ大事なことは創造への意欲と能力を育むことです。工学系の大学ではどこも、「創造性を育てる」と言いますが、では創造性とはいったい何でしょうか。私は自分の持つている知識や知恵をフル活用して自分が解くべき問題の解決や発掘すべき可能性の開拓を進める志や、工夫を進める力だと思えます。研究や発明とは、多くを学んだ後に始めるものではなく、常日頃からの何かし

らの創意工夫によって取り組むさまざまなものも含んでいます。そうした主体的な姿勢や意識をもつことが重要なので、1学年時からそうした経験ができる機会を提供する教育を進めています。

「判断力」「決断力」そして「切断力」

湊 私は、知識をたくさん身に付けた人材を育てるのではなく、「人間とは何か」「生きる目的とは何か」を追求し、冷静な判断力、決断力、そしてその上に切断力を備えた人物を育てたいと思っています。

誰でも判断し決断することはできても、切り捨てることができなければ、たとえトップに立ったとしてもイエスマンになってしまいます。ですから、私は学生たちにも、判断力、決断力、そして切断力の三つが大事であるという話をしています。

切断力をしっかりとするには自己確立が必要であり、そのうえでの特ランス、すなわち「寛容の精神」を根底にもった女性を育てたいと思っています。

女性のキャリアを考えたときには、子育て

時など仕事を減らすことが求められる時期もあり、その期間もキャリアであるという意味づけが必要です。仕事に就いてお金を得るプロセスこそがキャリアであるという先生もいらっしゃると思いますが、「金銭化されないキャリアもある」という概念をしっかりと持たないと、名刺の肩書がなくなった翌日に元気がなくなってしまう。まさに、マルチン・ルターが言ったCallingの概念であり、Callingは召命と訳されますが、もう一つの意味は職業です。人生最後の日までがCallingなのであり、キャリアだという概念を、学生にしっかりと教えています。

こういったリベラルアーツ教育を通して、「ぶれない個」を確立し、人格が形成され、しっかりとしたキャリアの概念を持ちあわせることこそが重要であり、今、話題のグローバル人材も、英語を話せるか否かといったことだけではなく、判断力・決断力・切断力こそが必須の力であると考えています。

タイプ2では「特色を発揮し、地域の発展を重層的に支える大学づくり」という概念に沿っているいろいろなプロジェクトを組んでおり、地域社会に根差して、地域と重層的な関

係を持った大学にしたいと考えています。

具体的な取組事例として、一つだけご紹介しますと、広島県と提携した高大連携による留学支援プロジェクトがあります。これは、高等学校の生徒と大学生が一緒に、「グローバルとは何か、国際化とは何か」ということを広島で学ぶという取り組みであり、広島、そして日本から世界に向かって発信することも念頭に置いたタイプ2のプロジェクトでした。好評でしたのでその内容を引き続き形で大学独自の高大連携のプログラムを組みました。

オープンキャンパスの日に合わせて、「高校生のためのわくわく留学講座」を開催します。異文化に触れる楽しみや留学体験記を、日本に留学してきた学生、外国に留学した学生に話してもらい、外国人教員によるコメントの場などを設けます。講座の最後には「これから留学を志すあなたに」という題で、私が自分自身の体験を振り返り語ります。異文化経験が人生の価値観を変革させることを若い人に向けて発信したいと思います。

芹澤 私立大学等改革総合支援事業は、4つのタイプに分かれていますので、例えば、



タイプ2にかかわって「本学は地域貢献の観点からいろいろな企業と一緒に」となった場合、タイプ4のグローバル化とのどちらを選択するかという、あたかも二者択一に見えてしまいがちです。しかし、二つをつなげて一つにして推進していくことが大切であるというお話がありました。あらためて、一体化する意義をお教えいただけますでしょうか。

タイプ別「択一論」を超えた「統合論」

清水 西欧中心でなく各文明国の発展を描

いた『歴史の研究』で著名なイギリスの歴史学者のアーノルド・J・トインビー博士が昭和42年（1967年）に伊勢神宮を訪れ、「Here, in this Holy place, I feel the underlying of all religions」と書き残されました。この聖地において、あらゆる宗教の根底的な統一性を感じるという言葉に、優れた文明史家の鋭い直感と深い意味が示唆されています。

私どもの大学は、文部科学省が求めているレベルのグローバル化には程遠いのですが、さまざまな試みをしております。その一つに、2年続けて行った欧米の大学院生が約3週間、本学で「伊勢」と日本スタディプログラム」を受講しました。この事業は伊勢市とタイアップして行っているものですが、昨年は7か国13名、今年は9か国11名が参加しました。各国の著名な大学の大学院生が参加し好評を得ています。

本学はこれまで日本の伝統文化についての研究と教育の実績を積み上げてきましたが、それを発信する能力が弱かったので、これから日本文化発信能力を養成しなければならぬと考えています。

語学を超え、日本の伝統、文化、 精神を介したグローバル化

清水

イギリスのケント大学は、インングランド国教会の総本山カントベリー大聖堂があるカントベリー市にあります。日本の聖地・神宮と伊勢市と皇學館大学とよく似た文化的背景があります。そのケント大学と協定を結んで5年、本学から100名近くの学生が1か月間、短期語学留学しました。1学年が700〜750人なので、今後その1割が語学研修を通して異文化体験をするということを目指しています。志と意欲と能力のある学生が留学し、その輪が広がることを期待しています。研究者交流も始まり、一昨年は本学で、昨年はケント大学で「伊勢と日本文化を語る」シンポジウムを開催しました。結構関心があるようで、イギリスの人たちもかなり集まってくれました。

湊

私は外国の生活が長く、外国人といろいろな交流がありますが、日本文化のとてもいいところ、英語にすることができない日本語というものがたくさんあるですね。例えば「間」とか、「無の境地」とか、「わびとさび」

といったものであり、それらの本質はさまざまな言葉尽くしても外国人にはなかなか理解してもらうことができません。この理解していただけない日本的思考体系が、実は国際社会での緊張を和らげることを国際会議などでよく経験しています。イエスとノーの二元の世界にもう一つの解決をもたらす「間」の役割を果たすのです。

私は、新渡戸稲造が国際連盟事務局次長を辞し、ジュネーブを去らなければならなかったときに送られた「送別の辞」をいつも心に留めています。そこには「この不寛容な世界に、あなたは東洋の寛容（トレランス）の精神をもたらし続けてくれました」という内容のメッセージが書かれていました。私は現在ワールド・ビジョンのアジア代表国際理事の責任も負っています。よく理事会で「A K I K O、どう思いますか」と問われることがありますが、この送別の辞を思い出しながら、もう一つの解決の道を示すことがよくあります。

清水

教養とは何か、人格教育とは何か、グローバルとは何かを大学はもつと豊かに教えないといけない、最近強く感じています。

本学の学生とともに、アメリカの全米桜祭りに行ってきました。伊勢で少年時代を過ごし、選挙基盤が伊勢にあった尾崎弴堂が東京市長であった時に、友好親善のために桜を米国に贈った返礼として、アメリカのタフト大統領から日本にハナミズキが贈られてから今年100年という記念すべき年に当たり、招待を受けました。行って驚いたのは、日本の象徴である桜が、国境や人種や民族の違いを越えて、その美しさを愛で、非常な盛り上がりを見せていたことです。ワシントンD Cの目抜き通りを完全に交通止めにして、押すな押すなの盛況で期間中約100万人近い賑わいだったそうです。本居宣長が「やまとごころ」として愛でた桜の花が、国境を越えて人の心を打つ。尾崎弴堂が日米親善友好のために贈った心が、今ここで花開いていることを実感しました。

神

今、俳句への国際的な関心が高まっています。シェイクスピアには及ばないかもしれませんが、松尾芭蕉と正岡子規は、世界の文学を豊かにした二人としてもっと認識されるようになると思います。そうなったとき、俳句で有名な松山の街は、豊かなものを

生み出す土壌としての役割が再認識されることになるのではないのでしょうか。

棟方 松山は俳句に対する愛着が非常に強く、高校生を中心に俳句甲子園というコンクールを催しています。私も審査員を務めています。愛媛文学賞の候補作品に俳論が何冊もあげられるなど、松山には俳句文化をきちんと受け継ごうとする意欲と熱意があります。そうした良さを海外にアピールしようと思われているかという点、必ずしもそうではないように思います。

人生を生きていくうえで直面するいろいろな体験の中で、グローバル体験はやはり大きな影響を与えるものであり、そのための準備をいかにしておくかということがとても必要ですね。

本学が創立して128年たったといっても、松山という街はとてもドメスティックな街で、キリスト教文化自体が松山では異文化なのです。本学にも、ハワイやオーストラリアに短期留学する制度はありますが、それよりも、本学には少ないながらも東アジアからの留学生がいて、彼女たちが非常にいい刺激を与えてくれて、日常的にアジアを中心とし

た身近な国、身近な異文化を体験できることが、グローバルな姿勢への備えにとっても役に立っていると思います。

本学の卒業生の85%以上は地場産業や地元の仕事に就職しますが、今、私たちが目指しているのは、学生時代に異文化体験によつて受けた刺激を、大学の社会人継続プログラムのような形にできないかということです。

これは一つの課題であると同時に、実は地域で生活していても、実際にはビジネスやコミュニケーションの広がりを見ると、否応でもインターネットを介して世界につながってしまう現実があります。これは私見になりますが、地域の中にあっても、若者はインターネットを通じてコミュニケーションできるようなことが、最低限の備えておくべき基礎的な知識になるのではないかと感じています。そういつた身近なグローバルも忘れてはいけないと思います。

地方都市の特長を踏まえた グローバル化への取り組み

湊 日本語で「国際人」という言葉があり

ますが、英語にはインターナショナルななどという言葉はありませんから、国際化とは何か、グローバル化とは何かをもっと追求していく必要がありますね。

私立大学等改革総合支援事業のタイプ4のグローバル化にも、かなり関わっているのですが、8月6日にかけて平和式典に参加し、原爆ドームや資料館を見学した後にはディスカッションを行うという平和学習プロジェクトに、棟方先生の大学や、アメリカのセントエリザベス大学やポーリング・グリーン州立大学からも参加していただいています。人数が少し限られてしまっていますが、もっと盛んにしていきたいと思っています。

棟方 韓国や中国からの留学生が参加することもあり、非常に大きな刺激になっており、学生の成長にとってもいいチャンスを与えてくださっています。広島はグローバルを語るに足る強力なコンテキストを持っていて、それは、広島でないと実現できないことだと思います。

湊 私が81歳で広島に単身赴任する決心をさせた根底には、残された生涯を広島で平和学習に捧げたいと思ったからです。私は戦争

体験者であり、防空壕で生き埋めになり、九死に一生を得た経験もありますから、今与えられている命は広島で散つてよしと、そういう覚悟で引き受けました。ですから「平和学習」のために、また、広島から世界に発信することに労力を使うことは、私にとつて本当に感謝していることなのです。

神 素晴らしい国際的な取組みですね。話は変わりますが、工学系の学生は日本の企業に就職しても海外勤務の機会が多くなっています。実際、ビザをとるために、英文の卒業証明書に頻繁にサインをしています。そうした状況ですので、英語教育には力を入れていきます。英語教員からは、ネイティブの先生を増やしてほしいという要望がありますが、私は、プロフェッショナルにとつては、ネイティブイングリッシュよりも豊かな内容を分かります。よく伝える言語能力の育成に重点を置くべきだと言っています。ドイツ人やスウェーデン人の優れた職業人の英語は、アメリカ人の平均的な英語よりも分かりやすく、コンテンツが豊かであり、質が高いと感じています。もちろん、もっと優れた英語を話す英米人もいますから、英米の優れた文化を直接学

ぶことも大事ですが、今後は世界に向けて、重要な内容を正確に分かりやすく伝える英語の力がより重要になると考え、それに沿つた英語教育に力を入れています。

去年は80人の入学者に対し40人が海外英語研修に出掛けました。また、修士課程に40人くらい進学しますが、約3分の1が海外の研究機関で2か月のインターシップを体験しています。インターンでは専門性も語学力もアップしますが、実は語学力よりも大事なのは現地の人と協力できる人柄なんですね。棟方先生がおっしゃったように、一緒に気持ちよく仕事ができるか、本人が信頼されるかです。こうした海外研修の経験談が他の学生にも伝わり、自分も行く、私も行くという状態が生まれています。

地域差があるとは思いますが、外国人が日本の独自の魅力をより感じるのは、東京などの大都市よりも松山や伊勢のほうなのではないでしょうか。

棟方 一地方都市で育つて中央やグローバルをめざす人は、大学進学段階で地元から巣立っていきます。ですから地元に残る、とくに女子は、もともと生涯にわたつて地元で暮

らしたいと思つて地元に残っていると見方ができます。しかし、人生にはいろいろな偶然が起こりますから、地元にいるつもりでも海外に行くことになる人がいます。

地方と中央の断絶

—断絶解消のための大学間連携の可能性

湊 私が感じたのは、地方には、個々の地域の風習や文化を大切にすべし、大都会に行くよりも郷土を大切に思う心が豊かであると感じます。それと同時に中央の流れがストリートに浸透してこない傾向も感じます。

昨年学長に就任して以来、他大学との連携プロジェクトの推進を考えています。東京の大学にも平和学はいくつもあります。夏休みには広島に来ていただき、単位を取れるプロジェクトを組みたいと思っています。逆に地方の女子学生も東京の大学と交流し国内短期留学の形で単位取得を可能にできればと考えています。地方と中央という断絶を少しでも解消し、少子化時代を迎えるこの時の大切な課題解決の糸口になれば幸いです。

棟方 それはとても普遍的な、いいご指摘だと思います。一つのカテゴリーで各大学の個

性をはっきりさせること自体はいいと思いますが、私立大学は多様ですから、類型は類型であって、現実はいろいろな混合したレシビで独自のものをつくっていくということが、たぶん最終的には生き残っていく道になるでしょう。

機能別分化という基本は変わらなくても、それだけで凝り固まってしまうと、学生にとつて本当に適切かという疑問があります。それを打ち破っていくために、个性的な大学が地域を横断するプログラム、学生が参加する連携ができれば、学生の交流が図られることによってそれぞれに新しい刺激をきちんと与えていくということが実現するのではないでしょう。

湊 地域の大学の半分弱が定員未充足になつている現状は、今後ますます深刻になります。その解決策として大学同士の合併が提案されますが、その解決方法は安易すぎるのではとかねがね考えていました。例えば広島県内でプロテスタントの女子大学は本学しかありませんから、簡単に「ほかの大学と合併」と言われても相手を選ぶ必要があるのです。

そこで、日本で同じ理念に立つ大学同志が交流し、特色をキープしながら存続を可能にできればと考えます。その試みとして、戦後70年のこの年に、建学の理念を同じくする東京の津田塾大学と東京女子大学と地方の広島女学院大学の女性学長が「女子教育と平和メッセージ」を広島から発信することになりました。起爆剤になればうれしいです。

芹澤 各大学が、立地する、あるいは関係する地域社会を大切にし、そこを志向する教育をしていこうとお考えになつていくことがよく理解できました。そしてその教育に、それぞれの大学の個性や理念が反映してくるのだと思います。

先生方の大学でお考えになつている将来像や、今後改革を進めていくうえで最も大切にしようとする事について、お教えいただきたいと思ひます。いかがでしょうか。

大学連携による資源の連結と最大限の活用

榊 質の高い人材の育成と学術の振興は、全の大学が担う共通の使命ですが、この目的のために、各大学が持つ資源を連結させ、最

大限に活かす必要があると思ひます。

例えば、研究面でいえば、我が国の私立と国立大学で働く教員の多くは、多忙であり、研究者として必ずしも恵まれた状態にはありませんが、研究人材として、層が厚く、貴重な資源と言えます。研究者間や大学間で競い合い、大学の枠を越えて教員が相互に協力し、知恵や装置の活用を進め、厳しい財政状況の中でも、質の高い研究を進めていけるかが、問われています。

東京はすばらしい都市ですが、職住接近がより容易な地域にも多くの大学があり、研究人材は全国に分散しています。そうした資源をよりよく活用できれば、大学の研究・教育への貢献はより大きくできると思ひます。

そうした大学間の協力を強めるには、関係者の意識改革だけでなく、制度改革も必要でしょう。最近話題になつている複数大学によるクロスアポイントメント雇用も推進すべきでしょう。二、三の大学による雇用が進めば、人件費負担が軽減され、研究施設の共用が進むでしょう。

私どもの大学は500人しか学生がいまないので、教員は50名しか雇えません。人文

系の教員の雇用が十分ではないので、南山大学にお願いして、大型バスを出して南山大学の提供する教養科目の講義に行かせることもやっています。できれば、将来は南山と五分五分で教養系の教員を雇いたいと思っています。ちよつと考え方を変えようと、厳しい環境をプラスの方向に転換できる場合もあるのではないでしょうか。

我が国の大学の全てが今のままでよいとは思いませんが、日本の独自性を活かし、良質な大学教育が提供できるなら、世界的に見ても、日本の大学はアメリカとは違った、魅力



あふれる留学先として再認識される可能性があると思います。

30年以上前から、全国大都市にある高等工業専門学校では、インドネシアやマレーシアなどから留学生を温かく受け入れ、優れた教育を行い、人材育成に大きく貢献してきました。

この例から見ても、我が国の大学は、現有の資源をよりよく活用して、良質な教育を提供する仕組みを構築していくことが大事だと思います。

棟方 先ほども少し話が出ましたが、私は連携と交流が大事だと思います。私学の、特に職員の場合が多いのですが、いったんその大学に就職すると生涯そこにとどまるという形になります。そういう意味で、地方の大学では、仲間も競争相手も先輩も後輩もずっと同じという極めて限られたチームの中で働くことになります。

以前、大学コンソーシアム京都のお話を聞いたことがあります。各大学からコンソーシアムの事務局に職員や委員を出しています。そこではかの大学の教職員と一緒に仕事をする中で、他大学の取り組みを通じて得る

気付きが非常に多いとのことでした。一つの大学の中に生涯とどまっていると得がたい刺激や体験や知恵を受け取ることができるというお話を聞いて、実にそのとおりだと思いました。

**地域、エリア、設置形態を超えた連携、交流
—— 旗印の違いが交流促進を生む**

棟方 例えば、連携のネットワークの中で、教員だけではなく、職員の人事交流も考えられるのではないかと思います。四国の場合はSPODといつて、四国地区の高等教育機関が加盟している教職員能力開発ネットワークがあり、SD・FD事業を展開しています。そういったものを、例えば学生も含めた連携の中で考えてみることも可能でしょう。アメリカには連合大学院という例もあります。

ビジネスの世界に例えると、今の大学は個人商店の集まりになっています。国立、公立、私立大学というように、設置者と設置の経緯によつて全て違うわけですが、学生の立場からすると、ショッピングモールのようにもつと自由に交流できないものかと考えられます。国公私 の 枠組みを超えた交流が得

できれば、学生にとってもプラスになるわけですし、学生は大学を比較検討することができるようになりますので、FD・SDといわなくとも、大学側もいや応なく自ら正すということになり、教職員の成長にも結び付くことにもなるでしょう。そうした既存の枠を超えた連携のようなものを通じた交流が、今後は必要なのではないでしょうか。

七つの機能別分化は、私はある意味で必然だと思っています。大学としての共通部分はもちろん大事にしながら、それぞれ個性が違うからこそ連携する意味があるわけです。うちは文科系の大学だけれども、理科系の科目も学びたい学生がいるというときに、他大学との連携の中できちんと理科系の科目も学ばせるといったことも可能になるでしょう。それぞれ旗印が明確に違うことが、むしろ交流が促進される要素になってほしいと思っています。

清水 文部科学省が示す大学の機能別分化と個性化の中で、二つの方向性を考えています。本学の特徴をしっかりと踏まえて、日本の精神文化の拠点、日本の精神文化センターを目指す。それが一点目です。

第二点は、地（知）の拠点大学として、地域貢献人材の育成です。本学は神宮の神域近く、内宮と外宮の中間の場所にある大学です。そういう地の利というか、まさにそこに立地している大学としての特性からいえば、地（知）の拠点としての方向性を追求していく。実はこの二点は表裏一体のもので、高い専門性と幅広い教養と実践力を備えた人材育成を意味します。その実現のためには、大学や地域や行政、産業界等と連携を進めていかなければなりません。残っているのが大学連携です。三重県の中で、まず私立大学間でコンソーシアム三重を創設しました。

三重県も、先ほどお話がありましたように、18歳人口の多くが中央や都市部に流出しています。その中で、三重県の私立大学としての魅力化を共通の課題として、どこに問題点や解決の糸口があるのかを一緒に考えましょうというところで始めました。

地域社会のグローバル化と日本語教育

清水 さらに、三重県知事が旗を振って、若者が地元に残るような三重の大学の魅力化

を考えようということ、来年から国公私立全大学によるコンソーシアムができる予定です。事業内容はまだ明確になっていませんが、個別の大学の特性を生かしながら、三重県全体として大学の魅力化を模索することになっていきます。

そこではいろいろなことが出てくると思いますが、例えば三重県と伊勢赤十字病院、そして皇學館大学が去年、協定を結びました。病院にはベトナムから看護師になろうとやってきた人がいますが、日本語の習得が障害になっていきます。それを私どもの大学が受け入れる、日本語教育をし、看護師資格を取得する手助けをする。このように、さまざまな課題に対して各大学が自らの特色を生かして貢献することができると思います。

グローバルということを考える場合にも、私どもの根本にあるのはやはり日本語です。本学では、神道英語という科目を新たに取り入れました。英語では非常に表現しにくいことがありますが、それを克服するためにも、まず日本語で正確に表現できなければ外国語で語れません。だからこそ日本語の教育をしっかりとやっていく。日本の文化をどのよ

うに表現すれば真の理解につながるか、そんなことも大きな課題にしていきたいと思っています。

「何かができる」人材よりも

「存在することに意味のある」人物の育成

湊 私は3点お話ししたいのですが、まず「何かができる」という人材ではなく、存在することに意味のある人物になってほしい。これが私の教育の基本です。他のことばでいえば「良い意味の自信を持った、ぶれない個の確立」です。私は一生涯、女子教育に携わってきましたが、今の女性に本当に望んでいる第一点がこれです。

女子教育機関不要論を耳にすることがあり、私も女子大学を卒業していますが、女性だけの世界であるということは、その中では異性を気にしなくていいというメリットは大きいと思います。もちろんボーイフレンドもいたし、恋もしましたが、キャンパス内での日常生活の中で異性を気にすることなく、女性だけの世界で自信を持つことができず、力仕事からすべて自分たちでやらなくてはならない、そういう中で自己を見つめることが

でき、女性としての自分の存在意義に自信を持つことができる。その中で決断力や切断力を身に付けることができるということが第一点です。だから、女子大学は女子大学として存在してほしい。

二点目は、「女性の一生涯を生かすキャリア教育」です。キャリアアセンターでは就職を支援します。一般の大学ではそこで終わります。しかし、女性には出産の時期があり、どうしても男性と同じライフ・サイクルで行動できない時期がありますが、人生後半はフルに活動可能です。女性の一生涯をサポートするエンパワーメントセンターを3人の子育てしながら55年働いた経験を活かし充実させたいと考えています。

先ほど棟方先生も言われましたが、本学にも短大を出て就職し、結婚して子育てが終わってから大学に戻って学ぶことができるプロジェクトもあります。単位にはなりません。それを、きちんと単位を修得して学位が取れるコースと位置づけ、女性の後半の人生を充実させる踏み石とさせたいと思います。最後に、「イングリッシュアイルランドの充実」です。イングリッシュアイルランドとは、

ハローしか言えなくてもいい、堂々と握手をして、にこやかに交流できる場所です。日本人はいつも何歩か引いてしまうんですね。私はかなりアメリカナイズされていますが、これからの日本人には大切な社交術です。6月から学長主催で始めます。

明治初期には長崎、福岡、広島など地方都市に次々に女子教育機関が設立されました。今もう一度、地方型女子教育機関の活性化に努力したいと思います。

芹澤 本日の先生方のお話をお伺いしておりましたところ、地域、人間教育、あるいはリベラルアーツという言葉が何度も出てきたように思います。

座談会が始まる前は、大学を機能面から見たいくつかの類型の選択に関するお話になると思っておりましたが、より根本的な部分に及びました。地域社会のため、基礎的な人格陶冶のための教育を継続していくために、常に足元を見つめ直すことの必要性、すべての私立大学にとつての拠って立つべき共通基盤は何かということを再確認する機会になったと思います。本日は、どうもありがとうございました。